

敬語表現における熊本方言

— ス・サス表現を中心として —

新堀 史 絵

はじめに

私たちが人と話すとき、相手によって敬語を交えたり、その敬語を使い分けたりしている。そんな中で、同じ熊本県内でも地域により敬語に対する意識が異なり、トラブルが生じた例を度々耳にすることが以前からあった。実際にも、人吉市出身の母との間で意識に違いがあるのではないかと感じたことがあった。

そこで当論文では、熊本県内での敬語表現における地域差がどのようになっているのか、同地域の年代による差があるのか、また、年代別に他地域との比較をすると差がどのように生じるか、そして、同じ語に対する年代や地域による敬意度や敬語における共通語化の実態などについて調べていきたい。

本論

一 熊本の方言

熊本県は、九州の中で肥筑方言に属している。しかし、阿蘇方言が大分県と地理的に近いことなどもあり、東九州の豊日方言に近く、県南の球磨・芦北・天草地方では薩隅方言風の語法も多く聞かれる。特に球磨地方は江戸期の藩主相良氏が島津氏との関係が深かった為、方言の影響も大きく、語法の面で最も薩隅方言に似た面を持っている。そして、天草地方は江戸時代から海を隔ててすぐ隣にある長崎（とくに島原）との交流も盛んで、現在でも天草の医師の多くは長崎医科大学の出身であったりするなど、人の出入りも多く、方言においても長崎の影響を受けている。そのような要因を考慮して、県内では更に表一のような区分がなされる。

(表一)

北部中部方言
北部中部方言……………下の地域を除く地域
東部方言……………阿蘇郡・上益城郡東部
南部方言……………球磨郡・芦北郡・天草郡・八代郡

『国語学研究事典』明治書院、秋山正次「肥後の方言」(一九七九 桜楓社より)

二 熊本の敬語

秋吉正次・吉岡泰夫著の『暮らしに生きる熊本方言』によると

方言敬語は西に厚く東に薄いと言われるが、特に熊本や近畿中央部は敬語を中心とする待遇表現が多彩である。したがって、ことばによる待遇のしかた、敬語の使い方にも厳格な規範意識が保たれている。

と記されている。

また、別の特色としては、「ハイヨ」などの尊敬語が〈拝領〉に由来する言葉で、〈御座る〉に由来する「ゴザル・ゴザス・ゴザルマス」などの言葉があり、古語的な敬語の語法を保持しているということがいえる。

三 調査の概要

調査の方法

熊本県の敬語使用の実態を調査するため、熊本県内中学校に調査を依頼し、永く地元に住している三世代同居の

家庭、またはそれに準じた家庭の生徒を二名選出し、その生徒本人と家族に解答してもらい、更にそのうちより条件の整っている一件を選出し、その家庭の子世代、親世代、祖父母の世代一人ずつの解答を各地点のデータとした。

調査の対象

調査の対象となるのは、上の条件により選出された家庭の生徒と兄弟、そしてその父母、祖父母である。そして今回は、本人とその兄弟を若年層と区別し、両親の世代を中年層、祖父母の世代を老年層と区別した。

そして、調査校の選定は、熊本県十一の教育行政区域それぞれから場所に偏りが出ないように留意しながら中学校を選出した。市町村が密集している地域を除いては、各市町村にある中学校一校に依頼した。

その結果、七十四校に調査を依頼し、五十五校の回答を得られた。

更に今回は私自らが四つの家庭に直接調査を依頼し、最終的に五十九の地域から回答を得ることができた。

調査内容

解答の際に、まず次のことから調査を始めた。

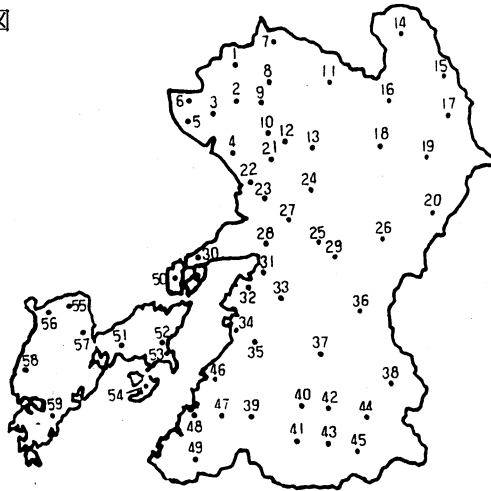
①性別

②生まれた年(年齢)

③住所(町名)

④今までの居住歴

調査地点図



調査地点一覧表

地点番号	調査地点	地点番号	調査地点	地点番号	調査地点
1	玉名郡三加和町津田	21	熊本市下硯川	41	人吉市土手町
2	玉名郡菊水町瀬川	22	熊本市小島下町	42	球磨郡相良村
3	玉名市築地	23	熊本市川尻	43	球磨郡錦町木上北
4	玉名郡天水町小天	24	上益城郡益城町小池	44	球磨郡多良木町多良木
5	玉名郡長洲町	25	上益城郡甲佐町	45	球磨郡上村
6	荒尾市原万田	26	上益城郡矢部町	46	葦北郡芦北町湯浦
7	鹿本郡鹿北町芋生	27	下益城郡城南町千町	47	葦北郡芦北町大野
8	山鹿市九日町	28	下益城郡富合町木原	48	葦北郡津奈木町
9	鹿本郡鹿央町仁王堂	29	下益城郡砥用町永富	49	水俣市葛渡
10	鹿本郡植木町有泉	30	宇土郡三角町波多浦	50	天草郡大矢野町登立
11	菊池市木庭	31	八代郡竜北町鹿野	51	天草郡栖本町湯下
12	菊池郡西合志町合生	32	八代郡鏡町	52	天草郡姫戸町二間戸
13	菊池郡菊陽町津久礼	33	八代郡東陽村	53	天草郡龍ヶ岳町高戸
14	阿蘇郡小国町宮原	34	八代市日奈久	54	天草郡御所浦町
15	阿蘇郡産山村田尻	35	八代郡坂本村生名子	55	天草郡五和町下内野
16	阿蘇郡阿蘇町内牧	36	八代郡泉村	56	天草郡苓北町富岡
17	阿蘇郡波野村新波野	37	球磨郡五木村	57	本渡市本渡
18	阿蘇郡長陽町河陽	38	球磨郡水上村江代	58	天草郡天草町下田
19	阿蘇郡高森町	39	球磨郡球磨村一勝地	59	牛深市深海町
20	阿蘇郡蘇陽町	40	球磨郡山江村万江		

次に、敬語について質問を行った。

今回は、敬語表現の中でも、特に尊敬の助動詞に焦点を絞り、調査をおこなった。

解答は、予め示しておいた例文を記号で一つだけ選ぶようにし、該当するものがない場合は直接記入とした。

また、敬意度を調査するため、同じ例文に対し、それぞれ聞き手を変化させた次の三つの場面についての用法を尋ねた。

a、親しい人に話す時

b、それ程親しくない人に話す時

c、よその土地から来ている人に話す時

これは、聞き手との親疎の度合から考え、aからcへ進むにつれて人間の心理的な距離は離れるものと想定した。したがって、話すときもaよりb、bよりcの方がぐだけた口調から改まった口調へ、より敬意度の高い語を用いるのではないかと考え、聞き手の変化による敬語使用法の変化を調査した。

そして、今回は敬意度だけでなく、県内五十九の地点を調査することで、地域差を、若年層と中年層、老年層の三世代の相違を調査する。

そのようにして、今回は、尊敬の助動詞の中で特に「ス・サス（ラスも含む）」に注目しながら考察をすすめたいと

思う。

三 調査結果と分析

調査対象について

今回、調査を行った地点は、熊本県のほぼ全域、計五十九地点である。そして、それぞれの地点で若年層、中年層、老年層一人ずつの計百七十七名が調査の対象となった。

まず、性別・年齢・居住歴について調査を行った。そのおおよその内容は表2のようになる。

表二 調査対象の概要

	男性(人)	女性(人)	平均年齢	平均居住歴
若年層	二九	三〇	一四・四歳	一四・〇年
中年層	三三	二六	四一・七歳	四〇・三年
老年層	二八	三一	六九・九歳	六八・四年

① 男女比

まず、男女比であるが、各年齢層において大きな差がないよう注意した。

② 平均年齢

各年齢層が誕生した年代になおすと、若年層昭和五十年代後半、中年層昭和三十年代前半、老年層昭和初期頃になる。

③ 平均居住歴

表1に記した平均居住歴は今までの居住歴（居住地名・年数）を調査した中から、それぞれの調査地点における居住期間のみを計算したものである。

④分析の際の留意点

対象の選出をする段階で、女性が結婚をして男性の地元に住むという傾向が出てきた。

そのなかで最も目を引いたのは阿蘇の女性であった。熊本県の東の県境である阿蘇地方にすむ女性の他地域出身者の多くは隣の県、大分県出身なのである。阿蘇地方が江戸時代、参勤交代の道沿いであったこと、細川藩の飛地が現在の大分県に点在し、大分との行き来が昔から盛んであったことが理由にあげられる。

それは、勿論言語においても影響が十分にあると考えられるため、今後の分析でも十分注意したい点である。

〔尊敬の助動詞の使用状況について〕

当節では、前章で述べたように三つの場面を設定し、その場面による表現の違いについて尋ねた。質問は以下の通りである。

「先生が来た」ということを、普段どのように言っていますか。

a、親しい人に話す時、

b、それ程親しくない人に話す時、

c、よその土地から来ている人に話す時

それぞれの場面について、次の中から一つだけ選んで下さい。

（同じ解答が重なってもかまいません。）

- 一 先生のキサツシヤッタ
- 二 先生のキゴザッタ
- 三 先生のキナハッタ
- 四 先生のキナサッタ
- 五 先生のキヤッタ
- 六 先生のキナッタ
- 七 先生のコラシタ
- 八 先生のコライタ
- 九 先生のコラッタ
- 十 先生のキタデス
- 十一 先生のキタ
- 十二 先生がイラツシヤッタ
- 十三 その他（その内容を解答用紙に記入して下さい）

右の質問の解答は分析の際、次のような系統に分類した。

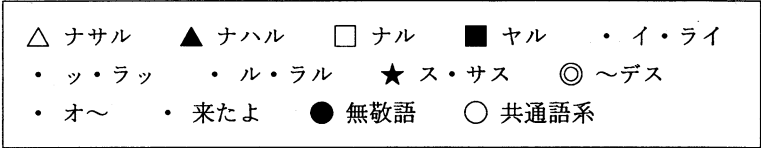
- シャル・サツシャル系 (例文：先生のキサツシャル)
- ゴザル系 (例文：先生のキゴザツ)
- ハナル系 (例文：先生のキナハツ)
- ナサル系 (例文：先生のキナサツ)
- ナル系 (例文：先生のキナツ)
- ヤル系 (例文：先生のキヤツ)
- イ・ライ系 (例文：先生のコライ)
- ツ・ラツ系 (例文：先生のコラツ)
- ル・ラル系 (例文：先生のコラレ)
- ス・サス (ラスも含む)系 (例：先生のコラシ)
- へデス類 (例文：先生のコラシ)
- オへ類 (例文：先生のオイ)
- 来たよ (例文：先生の来たよ)
- 無敬語 (例文：先生のキ)
- 共通語系 (例文：先生が来ました・みました)

上記のへデス、オへは尊敬法助動詞ではないが、解答が複数見られ、傾向として見ることができると分類の対象とした。

次頁の地図はこの問題に対する解答を場面ごと、世代ごとと記号で示したものである。なお、地図中に見られる境界線は参考のため、熊本の方言区画を記したものである。

(表3) 若年層

	ナサル	ナハル	ナル	ヤル	イ・ライ	ツ・ラツ	ル・ラル	ス・サス	オへ	へデス	来たよ	無敬語	共通語系	計
a	0 0%	3 5%	3 5%	3 5%	2 3%	2 3%	0 0%	18 31%	0 0%	0 0%	0 0%	28 47%	0 0%	59 100%
b	2 3%	8 14%	4 7%	5 8%	5 8%	0 0%	0 0%	15 25%	0 0%	3 5%	5 8%	6 10%	6 10%	59 100%
c	2 3%	2 3%	2 3%	0 0%	2 3%	2 3%	0 0%	8 14%	0 0%	6 10%	3 5%	4 7%	28 47%	59 100%
計	4 2%	13 7%	9 5%	8 5%	9 5%	4 2%	0 0%	41 23%	0 0%	9 5%	8 5%	38 21%	34 19%	177 100%



《若年層》

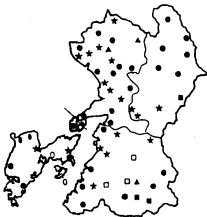


図3-a

《中年層》

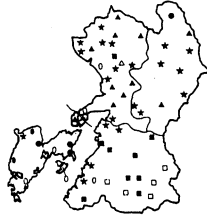


図4-a

《老年層》



図5-a

〔a. 親しい人に話す時〕

〔b. それ程親しくない人に話す時〕

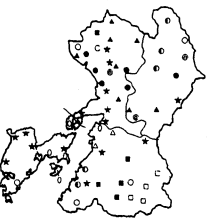


図3-b

〔c. その土地から来た人に話す時〕

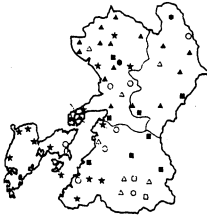


図4-b

〔c. その土地から来た人に話す時〕

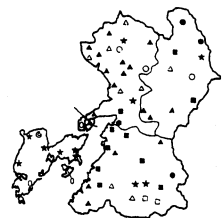


図5-b

〔c. その土地から来た人に話す時〕

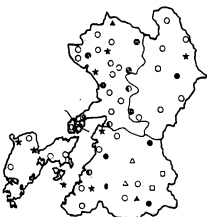


図3-c

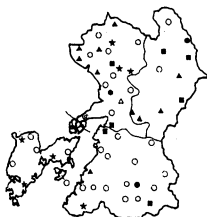


図4-c

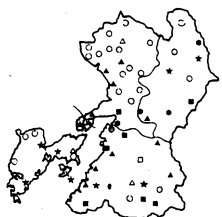


図5-c

若年層について

前頁に記した図3—a—3—cを集計したものが上の表3である。上段の数値は各地点で項目の語法を使用した地点数で、下段がそれぞれの場面でその項目が占めている使用率(%)を示している。

これを見ると、三つの場面を通してル・ラルと「オ」の表現は使用されておらず、若年層ではこれらの表現が定着していないということがわかる。

aの親しい人に話す時(以下aと記す)には「先生のキタ」の無敬語表現が二十八地点で全体の約四七%、ス・サスが約三一%を占めている。図3—aで区画ごとの分布の状況と見ると、東部では無敬語がほとんどでス・サスは見られない。北部は無敬語とス・サスが占めている。南部は他の地域に比べて、無敬語やス・サス系よりも表で少ない数値を示した語が集中している。中でも天草地方は、イ・ライとツ・ラッが主流で芦北などの不知火海沿いは他地域と同じく無敬語、ス・サスが多い。また、球磨地方は「ナル」と「ヤル」の表現が目を引き。「ナハル」は三地点で、東部には位置していない。

bのそれ程親しくない人に話す時(以下bと記す)について表3を見ると、今度はス・サスが約二五%を占めており、共通語系と「ナサル」、「来たよ」、「デス」などが使

用されるようになる。また、無敬語とス・サス、ツ・ラッだけがaより減少し、それ以外は全て増加の傾向にあることがわかる。そこで図3—bを見てみると、無敬語は北部に集中している。ス・サスは北部と芦北・八代では減少しているものの、天草では二地点から五地点へ増加している。「来たよ」と解答した地点は五つあり、3—aと比較すると、いずれも無敬語を使用していた地点で、「よ」をつけている。これは敬語法とは言えないが、優しい響きを持たせることで聞き手を配慮していることがわかる。「ナハル」は今度は北部と東部でのみ姿を見せており、南部の球磨地方では「ナル」「ヤル」が主流となっている。

今度はcのよその土地から来ている人に話す時(以下cと記す)について見てみよう。ここでは共通語系が全体の四七%を占め、急激な増加を見せている。この共通語系の分布を見ると、北部は二十一地点中十一地点、東部が十地点中七地点、南部が二十八地点中十地点と南部の共通語系の割合の低さが目につく。しかもbでは見られなかった無敬語が三地点に増加している。これは、よその土地の人という設問から私が意図していた聞き手との距離ではなく、「方言らしくない表現」というものを意識した結果出された解答だと想像できる。

(表4) 中年層

	ナサル	ナハル	ナル	ヤル	イ・ライ	ツ・ラツ	ル・ラル	ス・サス	オゝ	ゝデス	来たよ	無敬語	共通語系	計
a	1 2%	11 19%	5 8%	9 15%	6 10%	2 3%	0 0%	21 36%	0 0%	0 0%	0 0%	4 7%	0 0%	59 100%
b	7 12%	15 25%	2 3%	8 14%	1 2%	1 2%	1 2%	15 25%	1 2%	0 0%	0 0%	1 2%	7 12%	59 100%
c	0 0%	10 17%	0 0%	7 12%	0 0%	1 2%	5 8%	8 14%	2 3%	1 2%	0 0%	1 2%	24 41%	59 100%
計	8 5%	36 20%	7 4%	24 14%	7 4%	4 2%	6 3%	44 25%	3 2%	1 1%	0 0%	6 3%	31 18%	177 100%

中年層について

上の表4は、中年層について表3と同様にまとめたものである。中年層では「来たよ」という表現は三場面を通して見ることができない。

aについて見ていくと、若年層とは違い、無敬語は少ない。しかし、ス・サスは最も多く、二十一地点で使われている。その後が続くのが、「ナハル」の十一地点、「ヤル」の九地点である。図4—aを見ると、ス・サスは北部と東部に集中し、南部の球磨方面は「ナル」と「ヤル」、海沿いは「イ・ライ」と「ツ・ラツ」が多く見られる。また、「ナハル」は北部に集中している。若年層では南部にあまり見られなかった無敬語が四地点中三地点が天草に見られる。bでは「ナハル」とス・サスがそれぞれ十五地点で使われている。しかし、ス・サス系は実際にはaより減少している。地点が増加しているのは「ナサル」、「ナハル」、ル・ラル、「オゝ」、共通語などである。これは、ほぼ若年層においても同じことがいえる。図4—bから分布を見ると、北部では、ス・サスの代わりに「ナサル」と「ナハル」が現れ、北部で減少したス・サスが南下し、天草地方で見られる。ル・ラルは南部に見られる。

cを見てみると、最も多く使われているのは共通語の四一%を占めている。bよりも地点が増加しているのは、ル・ラルと「ゝデス」、「オゝ」である。そこで図4—cを見て

(表5) 老年層

	ナサル	ナハル	ナル	ヤル	イ・ライ	ツ・ラツ	ル・ラル	ス・サス	オ	くデス	来たよ	無敬語	共通語系	計
a	0 0%	20 34%	4 7%	6 10%	8 14%	1 2%	0 0%	16 27%	1 2%	0 0%	0 0%	3 5%	0 0%	59 100%
b	8 14%	17 29%	2 3%	10 17%	3 5%	0 0%	0 0%	11 19%	2 3%	1 2%	0 0%	2 3%	3 5%	59 100%
c	3 5%	10 17%	1 2%	7 12%	0 0%	1 2%	0 0%	9 15%	4 7%	1 2%	0 0%	0 0%	23 39%	59 100%
計	11 6%	47 27%	7 4%	23 13%	11 6%	2 1%	0 0%	36 20%	7 4%	2 1%	0 0%	5 3%	26 15%	177 100%

みると、若年層で南部に見られなかった共通語系が中年層では南部に集中している。「ヤル」はa、bにおいては南部がほとんどであったが、東部でみられる。「オ」の形は南部では見られない。

老年層について

表5は表3、4と同様に図5-a、b、cをもとにまとめたものである。これを見ると老年層では「来たよ」という表現は中年層と同様に使われていない。また、ル・ラルは若年層と同様に使われていない。

これも、同じくaから見ていくことにする。この場面で多く見られるのは、「ナハル」の二十地点、ス・サスの十六地点である。中年層では地点数は逆転しているものの、似た傾向を持つものとして考えられる。これらを図5-aで見えていくと、東部は「ナハル」が大半を占めており、北部は「ナハル」とス・サスで占めている。「ヤル」は県全域で見られる。ス・サスは最も特徴的な分布を見せており、九州本土西の海岸沿いに分布している。イ・ライはほとんどが天草に分布しており、「ナル」は球磨地方のみで分布している。

次はbであるが、ここで多く使われているのが、aと同じく、「ナハル」二九%とス・サス系一九%である。しかし、この二つはともに減少しており、その分「ヤル」「オ」が増加し、「ナサル」「くデス」が新しく出てきている。

図5—bをみると、aでス・サスを使っていた海岸沿いの地域では、北側が「ナハル」、南側が「ヤル」に変化している。そして、老年層でもス・サスが天草地方へ南下しているのがわかる。同じ南部方言といわれる球磨地方でもス・サスが姿をみせている。北部のaで「ナハル」を使っていた地点の中で「ナサル」に変わっている地点が数箇所ある。東部では、「ナサル」、「ヤル」、「オ」などの表現が広がっている。

cになると、やはり共通語系が多く使われ、三九%で「オ」とツ・ラッがやや増加傾向にあるだけで、他の用法は減少の傾向にある。これを図5—cで見ると、今度は共通語系が北部にかなりの割合で集中している。このような三世代にわたる共通語系の分布をどうとらえるべきであろうか。その他の地域では、共通語系と比べると必然的に少数派となるせいもあるだろうが、各地域で複数の表現が使われている。

(表6) 三世代の総合

	ナサル	ナハル	ナル	ヤル	イ・ライ	ツ・ラッ	ル・ラル	ス・サス	オ	くデス	来たよ	無敬語	共通語系	計
a	1 1%	34 19%	12 7%	18 10%	16 9%	5 3%	0 0%	55 31%	1 1%	0 0%	0 0%	35 20%	0 0%	177 100%
b	17 10%	40 23%	8 5%	23 13%	9 5%	1 1%	1 1%	41 23%	3 2%	4 2%	5 3%	9 5%	16 9%	177 100%
c	5 3%	22 12%	3 2%	14 8%	2 1%	4 2%	5 3%	25 14%	6 3%	8 5%	3 2%	5 3%	75 42%	177 100%
計	23 4%	96 18%	23 4%	55 10%	27 5%	10 2%	6 1%	121 23%	10 2%	12 2%	8 2%	49 9%	91 17%	531 100%

三世代を通じての考察

先に記した表6は三世代の合計を表3～5を参考に記したものである。共通語系はcの場面においていずれの年齢層もかなり使用されている。この分布はかなり特徴的で若年層ではおよそ北部に、中年層では南部に、老年層では北部に集中している。そこで、私はこう考えた。言語は普通、上の世代から下の世代へ順序よく伝えられると思われがちだが、今回の調査となった家庭はほとんどが三世代同居で、親世代は仕事などで忙しくしていることが多い為、意外に祖父母とその孫の方が一緒に過ごすことが多く、しかも子供は言語もまだ完全ではないため、親世代より子世代のほうが老年層の影響を受けているのではないか。そういうわけで私は、その世代同士がそれぞれの場面で共通の解答をした数値を方言区画にわけて下の表7～9にまとめてみた。

(表7) 若年層—中年層

	北部方言	東部方言	南部方言
a	4 19%	3 30%	7 25%
b	4 19%	3 30%	9 32%
c	4 19%	2 20%	8 32%

(表8) 中年層—老年層

	北部方言	東部方言	南部方言
a	10 48%	3 30%	13 46%
b	6 29%	4 40%	8 29%
c	5 24%	3 30%	9 32%

(表9) 若年層—老年層

	北部方言	東部方言	南部方言
a	4 19%	2 20%	9 32%
b	2 10%	2 20%	9 32%
c	8 38%	3 30%	8 29%

これを見てみると、cの場面ではどの世代間も共通語系が多いのである程度高い割合で共通の解答をしている。ただ、表7の北部は比較的低い割合であるが、これは共通語系の分布の割合がはつきりと違うことが要因だと思われる。

a、bの場面で見ると私の予想は大きく外れ、やはり中年層と老年層間の共通解答率は高い数値を示した。そして全体を区画ごとで見ると場面によって多少のずれはあるが、北部方言の共通解答率が比較的低くなっている。この地域は熊本市も含まれている。熊本市は県内では人の出入りが激しい土地で、言語が変化するスピードも早く、各年齢層の間に開きができたのであろう。

では、どういうことで共通語系は若年層と老年層では北部に、中年層のみが南部に集中しているのであろうか。

それは、社会的な要因が強いのではないかと考えられる。若年層はほとんどが居住している市町村内の学校に通っているため、交友関係もほとんどが居住地域内の人となる。老年層は現役で仕事をしている人は少なく、社会的活動はあまり行われていない。そして、地元へ永く住んでいる人であるので、やはり交友関係は居住地域内の人が多くなる。そこで問題となるのは中年層である。中年層の人は仕事をもち、経済的に家庭を支えている世代である。また、自ら車を運転して外へ出る機会も多く、社会的行動範囲が広

く、活発に活動する世代といえることができる。

また、熊本県の行政の中心地、熊本市から考えて、地理的・交通の便などの面から考えると、人吉盆地に囲まれた球磨地方が行き来しにくい土地であるといえる。すると、必然的にこれらの地域は言語においても比較的伝播しにくく、共通語化も遅れる。今回の調査においても、このような地域は特徴ある表現を使用している。しかし、これらの地域は仕事や行政の面において、熊本市周辺に出向く必要性が高くなる。その際、実際にそこへ出向くのは中年層が大半なのである。そして、そのときに先のような土地から来た人は、地元との違いを知り、一種のカルチャーショックを受け、ことばについても地元とよそで話す際に使うことばを意識して使い分けるようになるのではないだろうか。また、若年層と老年層が他の地域の人と話す場所は自分たちが多数派となる居住地域が多いが、中年層においては自分たちが少数派となるよその地域の方が多いのではないだろうか。これらのことから、南部地方における共通語系の分布は、社会的行動範囲が狭い若年層と老年層は共通語をあまり意識することがなく、社会的行動範囲が広い中年層が共通語系を使うことが多くなるということが考えられる。この社会的行動範囲から見た特性はほかにもいえることがある。すべての地図を見比べていくと、地域ごとに最も

記号がはっきりと分かれているのは図4—aである。これに対して最も不規則に記号が並んでいるのは意外にも、同じ中年層の図4—bなのである。仕事などをする上では、さまざまな人と話さなければならなくなる。そして、失礼にならない配慮も必要となる。そこで、中年層が自然と県内のさまざまな言語に接触しながら、熊本の方言の共通語化を自然に行ってきたと言えないただろうか。

次に地域ごとに特性のある表現について述べたいと思う。三つの年齢層を通じて見ていくと、「ナハル」は北部でよく行われ、東部でも使われているが、南部ではあまり定着した語とは考えられない。そしてbの場面でも使われているため、ある程度高い敬意を示すものと思われる。

「ナサル」について見てみると、「ナサル」と同じ系統と考えられるのにもかかわらず、少数ではあるがどの区画にも見ることが出来る。本来は、熊本方言の「ナサル」は北部で行われていたものであろうが、共通語系の「ナサル」との混同が生じているのではないだろうか。

「ナル」と「ヤル」について見てみる。これらの表現はいずれも南部においてよく行われている。しかし、これは天草では全くと言っていいほど使われていない。どの世代のどの場面を見ても、「ナル」と「ヤル」が分布しているので、敬意度は現在ではほぼ同等であると見ることができ

る。また、「ヤル」に関しては、他の地域でもbとcの場面で使用されており、熊本県内で「ヤル」は敬語として認識されているようである。

次はイ・ライとその音便形のッ・ラッについて見てみよう。この表現は南部方言と一般にいわれているが、人吉出身の私の両親はこの表現を全く知らず、私もこの語を知ったのは大学に入ってからのことである。地図を見ると分かるように、この表現はほとんどが天草地方で使われているのである。敬意度はいずれもaで多く見られ、b、cにおいてはス・サスと共通語系に取って代わられるため、あまり高いものとはいえない、しかし、イ・ライのほうはbでも見られるので、どちらかというとイ・ライのほうが敬意が高いと考えられる。

次はス・サス系について見てみたい。先にも述べたように、この語は天草では高い敬意を示すが、他の地域では軽卑語として見られているという説が一般的であるが、今回の調査ではどのような結果が出ているのであろうか。

確かにaにおいては北部を中心に分布している。そしてbでは記号は一気に南下しているのである。また、老年層では区画通りでは表現できない分布を見せている。天草をまるで囲むように海沿いの地域に分布しているのである。吉岡泰夫氏によると、本来は北部方言で高い敬意を持って

いたのが、下駄の歯のように使い古されると敬意度がすり減っていくという「敬意漸減の法則」がはたらき、その周辺部ほど古い形が敬意を保存していると見られている。

(秋山正次 吉岡泰夫 一九九一『暮らしに生きる熊本方言』熊本日日新聞社参照)と述べているが、この現象が老年層の図5—a、5—bから読み取ることができる。しかし、若年層と老年層を見ると、b、cにおいても天草以外でもス・サス系が存在している。これらのことから、ス・サス系の敬意は変化しているのではないだろうか。この問題は次節でまた取り上げることにしたい。

次は「オ」の表現について見てみたい。かなり少数であるが、北部で見られる。しかも上の年齢層から減少の傾向にあるため、この表現はかなり衰えてきているということが出来る。

最後に私は、a、cでことばをどのように使い分けているかということや年齢層ごとに調べてみた。その結果、三つの場面を通じて同じ解答をしたのは下記の通りである。

若年層 三地点 (13 菊陽町)	19 高森町	57 本渡市)
中年層 三地点 (6 荒尾市)	26 矢部町	56 苓北町)
老年層 三地点 (10 植木町)	20 蘇陽町	29 砥用町)

括弧内の数字は右の地名の地点番号である。

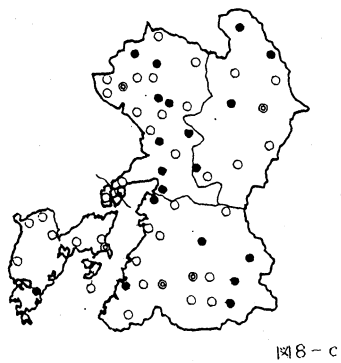
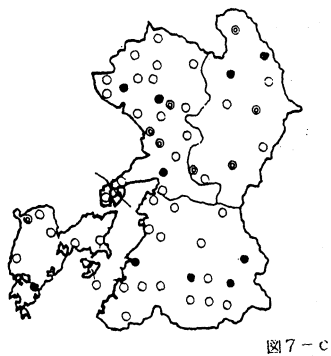
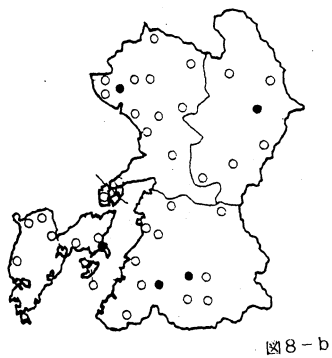
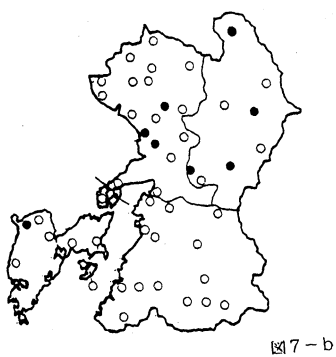
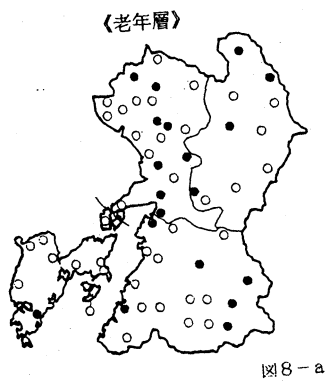
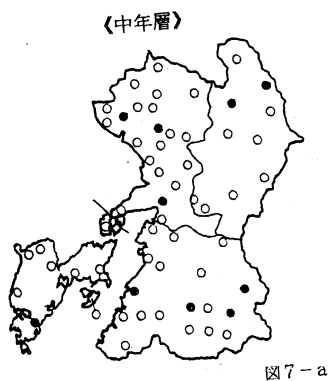
それぞれ五十九地点のうちの三地点であった。これは、

各年齢層で約5%となり、そのほかの約九五%の地域では場面ごとのことばを使い分けているということが分かる。これを見るとやはり熊本方言は場面ごとに言葉づかいに配慮する敬語活動が盛んな言語なのである。

「ス・サス系助動詞に対する意識調査」

当節に関する設問の内容は以下の通りである。そして次頁の図は一と二に関する地図である。

- 一、「先生がイイヨラシタ」などというように「くらした」とか「くさした」という話し方をしたことがありますか。
- 二、上の質問ではいと答えた方に質問です。「くらした」とか「くさした」のような言い方をして注意されたことがありますか。
- 三、上の質問であると答えた方に質問です。なぜ、その言い方ではいけないと言われたのですか。または、なぜ、いけないと思いますか。



《若年層》

○ 使ったことがある
 ⊗ 使ったことがない

〔 質 問 1 〕

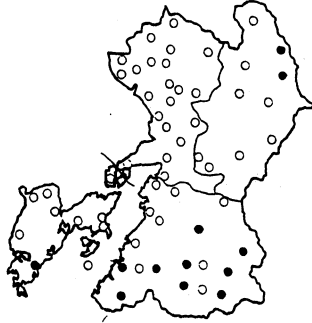


図6-a

⊗ 注意されたことがある
 ○ 注意されたことがない

〔 質 問 2 〕

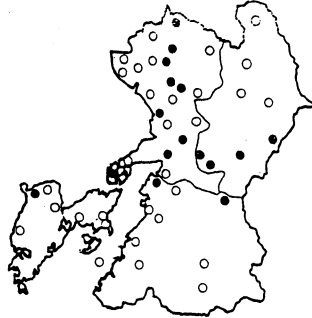


図6-b

⊗ 使ったことがない
 ⊙ 使ったことがあるが注意された
 ○ 使用するし注意も受けない

〔 総 合 〕

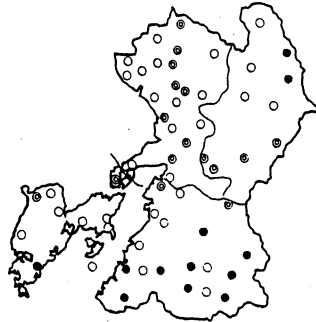


図6-c

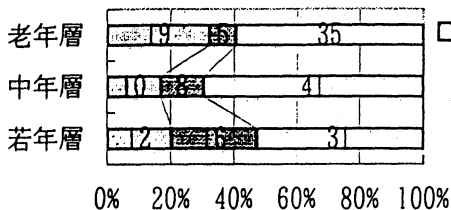
当節では、ス・サス系の表現の実際の実際の意識の差について
 まとめてみたい。

前頁の図の上段は1に対する解答で、中段は2に対する
 解答である。そして下段は1と2を総合して一つの地図に
 まとめたものである。分析の際には図8— a、 b、 cを中

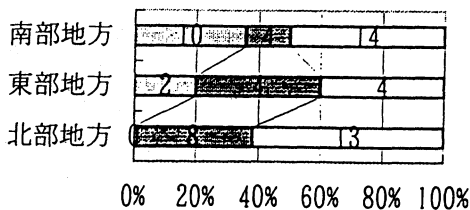
心に見ていきたいと思う。
 そして次に記したグラフはグラフ1が各年齢層の総合の
 割合を示したものである。グラフ2～4は各年齢層を区画
 ごとの割合で示したものである。

- 使用するし注意も
 受けない
- 使ったことはある
 が注意を受けた
- 使ったことがない

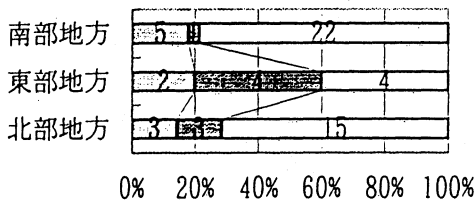
(グラフ1) 熊本全域



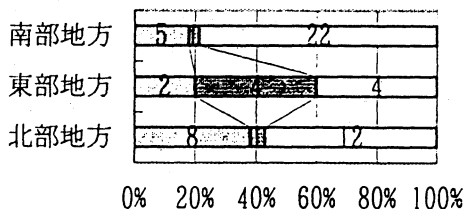
(グラフ2) 若年層



(グラフ3) 中年層



(グラフ4) 老年層



これらの図やグラフをみて、ス・サスの語法を使うことがタブーと見られているかどうかを調べるのだが、この場合、「使ったことはあるが注意を受けた」と「使ったことがない」と解答した地点はいずれも使用するのに抵抗があると判断する。まずグラフ1から見っていく。使ったことがないという解答が最も多いのは老年層である。ついで若年層、中年層の順である。これに注意を受けたという解答をそれぞれにプラスすると、若年層、老年層、中年層の順で使用することに抵抗を感じている。さらにこれを図とグラフ2、4で地理的な分布を見てみると、使ったことがないのは老年層と中年層において北部と東部の中の北側、天草以外の南部地方に分布している。また、若年層は南部が一気に増加し（約三五％）、一方の北部では全く分布していない。ここからス・サスの表現が若い世代で使う人が増加しつつあるといえる。さらに注意を受けたとの解答を足すと、割合は、いずれの年齢層においても東部地方が最も高く、約六〇％を占めている。それに次ぐのは老年層と中年層では北部地方なのであるが、若年層では南部地方となっている。これはどういうことであろうか。

まず、若年層が最も人の指導を受ける年代であるということである。そして、注意する人は何も親とは限らない。地元の出身ではない学校の教師であるとも想像できる。そ

う考えると、その土地にも様々な土地から人が出入りするようになっているのである。

今度は反対の視点から、ス・サスを抵抗なく使っている年齢層を見てみると、意外にも中年層が最も多いのである。これは先で述べた社会的行動範囲がここでも関係してくるのではないだろうか。つまり、文化は確かに中心からその周辺へ広がることが多いが、その反対も起こりうるのではないかということである。

こうやって年齢層別、区画別に比べてきたが、南部方言で天草は勿論ス・サスを多用している地域である。しかし球磨地方ではかなり抵抗があるようである。この事は十分に考慮しておく必要がある。こうして考えてみると、球磨地方と東部地方ではまだ高い割合でス・サスの使用を拒んでいるものの、北部地方においては認められつつあるのではないだろうか。

上述までの結果は設問の一と二までをまとめたものである。次は三に対する解答をまとめてみる。

この解答は、表などにはできなかったが、解答はほとんど「目上の人に対して失礼だから」「目上の人にはきちんと敬語を使うべき」というものであった。こうしてみると、ス・サスを敬語表現と全く認めていない人はやはりまだ多いのである。

しかし、若年層の中にいくつか「失礼になるからということ」で注意をうけたがそれは思えない」というス・サスの表現は決して失礼にはあたらないという幼い頃の私と同じ考えをもつ解答があった。その様な解答があったのは全て北部にすむひとであった。ス・サスの表現に対する意識は北部方言から徐々に変わりつつあるのではないだろうか。

「方言に対する意識について」

今回行った調査の一番最後の設問で、

方言について、または今までの質問の中で、ご意見や

ご感想がございましたら、ご記入下さい。

というものを行った。

これに対して、若年層の解答は

「何気なく使っている自分のことばについて考えることは難しかった。」というものが多く、中年層の解答は、序論でも述べたようなトラブルの体験や方言に関する情報などが記入されていた。

そして、老年層はというと、方言というものに対するご本人の意識について沢山の解答があった。その内容は大半が「方言を使ってはいけなれないと思いがちなおせない。」というもので、ごく少数で「方言を大切にしていきたい」というものがあつた。

こうしてみると、老年層が最も強く方言にコンプレック

スを感じているようである。上記の前者の解答はもちろんであるが、後者の解答をした人も「方言」というものを意識して使っているのである。

今の老年層の人々が幼い頃は周囲で共通語を話す人はほとんどいなかったであろう。そんな時代に育った人からすれば、情報化が進んだ現代の情報は勿論ほとんどが共通語であるから、自らが発することはとの差を感じずにはいられないのである。これに比べ、中年層は社会とのつながりも強く、むしろ情報化を進め、文化を変化させてきた世代であるので、このような戸惑いはない。

また、若年層は育ってきた時代がすでに情報化社会であったため、共通語を耳にしながら方言社会の中で育ってきた。したがって、この世代は無意識のうちに共通語と方言とを使っているといっても過言ではないのである。

「まとめ」

本章では調査をもとにした考察を行ってきたが、熊本方言では現在も尚、数多くの敬語表現が存在し、地域によっては同じ語でも異なる規範意識をもって使われていることが分かった。しかし、その規範意識は、日本共通語化の流れとともに熊本共通語化もすすみ、以前ほど厳しいものではなく、これはス・サス系の表現に対しても同じようなこ

とがいろいろ。確かに高い敬意があると認識している地域は限られているのだが、軽卑語であると認識する地域は減少を示している。したがって、ス・サス系は身内や親しいものに対する身内敬語という地位を確立しているのである。

そして、方言の区画についてだが、今回は通説としてよく知られている県内を三分する区画を参考にしてきたが、とくに南部方言は西の天草と中央の芦北、東の球磨でそれぞれ異なる特色があることが分かった。それは、今後熊本の方言区画を研究する際の重要な課題となることであろう。

おわりに

最後になったが、調査にご協力頂いた皆様や、調査の際に相談に乗っていただいた友人の皆様には心よりお礼を申し上げます。

当論文の参考文献は下記の通りである。

- 秋山正次 一九七九『肥後の方言』 桜楓社
秋山正次 吉岡泰夫一九九一『暮らしに生きる熊本の方言』 熊本日日新聞社
石坂正蔵 一九六九『敬語』講談社
奥村三雄 一九八九『九州方言の史的研究』 桜楓社
真田信治 一九八三『日本語のゆれ』 南雲堂
柴田 武 一九五八『現代日本語』 朝日新聞社

藤原与一 一九七八『方言敬語法の研究』(全三卷) 春陽堂

宇野義方 一九八五『敬語をどのように考えるか』 南雲堂

飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 一九八二『講座方言学』(全十卷) 国書刊行会

九州方言学会編 一九六九『九州方言の基礎的研究』 風間書房

辻村敏樹編 一九七一『講座国語史五 敬語史』 大修館書店

林四郎・南不二男編 一九七三『敬語講座六 現代の敬語』 明治書院

林四郎・南不二男編 一九七四『敬語講座八 現代の敬語』 明治書院

加藤正信 一九七四『言語』三一七「現代生活と方言の地位」

永瀬治郎 一九七四『言語』三一七「方言から標準語へ」

吉岡泰夫『国語国文学研究十七』「方言敬語法における敬意度について」熊本大学

神部宏泰 一九九二『研究草書一〇八九九州方言の表現論的研究』和泉書院

佐藤嘉代治編『国語学研究事典』明治書院
『日本語学大事典』